

# 木魚の配偶

長谷川時雨

青空文庫



木魚もくぎよの顔の老爺おじいさんが、あの額の上に丁字髻ちよんまげをのせて、短  
 い体に黒ちりめんの羽織を着て、大小をさしていた姿も滑稽こっけいで  
 あつたらうが、そういうまた老妻お婆あさんも美事な出来栄できばえの人物ひとだつ  
 た。顔は浜口首相より広く大きな面積をもち、身丈みのたけも偉大だつ  
 た。

うどの大木という譬たとえはあるが、若いころは知らず、この女ひとはと  
 ても味のある、ずば抜けたばかげさを持った無類の好人物だった。  
 湯川うじ氏が硫黄うじにこりだして、山谷さんやを宿とし、幾年か帰らなくな  
 ってから、老妻お婆あさんはハタと生活にさしせまった。江戸人は瓦解がかい  
 と一口にいうが、その折悲惨みじめだったのは、重に士族とそれに属し

た有閑階級で、町人——商人や職人はさほどの打撃はなかつた。扶持ふちに離れた士族は目なし鳥だつた。狡こすいものには賺だまされ、家禄放還金の公債も捲まきあげられ、家財を売り食ぐいしたり、娘を売つたり、鎗やり一筋の主が白昼大道に筵むしろを敷いて、その鎗や刀を売つてその日の糧かてにかえた。

木魚のおじいさんの奥方も、考えたはてに、戸板といたをもつてきて、その上でおせんべを焼いて売りだした。一文のお客にも、

「まあまあ私あたのお求め下さいますのですか。それは誠に有難いことでございます。」

という調子で、丁寧しんせつに手をついてお礼をいうのと、深切な焼きかたなので一人では手が廻りきれないほど売れだした。

あまり皺しわのない、大きな顔に不似合ふにがなほど謙遜けんそんした、黒子ほくろの  
 ような眼で焼き方を吟味し、ものものしい襷たすきがけの、戸板の上の、  
 道ばたのおせんべやの、無愛想あいきようなものも愛嬌あいぎようになつたのかも知  
 れない。すると、おなじ難澁なんじゆうをしていた姉娘が一日手伝いに  
 来て見ていて、翌日からすぐ隣りあつて、おなじ戸板の店を出し  
 た。もうその時は、はじめの縁に、遠州で仲人になつた旗本――  
 藤木前ささきの朝散ちようさんの太夫たいふの子か孫かが婿で、その若い二人組だつ  
 た。お客がくると、湯川氏の奥方おくがたがお辞儀じぎをしているうちに、  
 「いらつしやい、こちらが焼けていますよ。」  
 といったふうさうに浚さらつてゆく。客は売れるから焼手をふやしたおな  
 じ店だと思つている。老奥方おばあさんのお辞儀は段々ふえて、売れ高は

グングン減つてゆくが、そんな事に頓着とんじやくのない老嫗おばあさんは隣と店なりの売行きを感嘆して眺め、ホクホクしている。

「お前さん方、もつと此方へお出なすつたらよい。どうも私あたくしの店がお邪魔なようだ。」

全くお邪魔だといわれたかどうか、とにかく元祖戸板せんべいの店は取りかたづけられた。

真面目まじめな会話はなしをしている時に、子供心にも、狐きつねにつままれたのではないかと、ふと、老嫗おばあさんを呆あきれて見詰めることがあつた。

「祖父おじいさんも何時いつ帰りますことかねえ。」

そこまでがほんとの話で、突然いきなり、まっは愁つらいとみな仰おしやんす

けれどもなア——とケロケロと唄いだすのだった。そして小首を傾げて、

「あれはたしか、長唄の汐くみでしたっけかねえ。あの踊りはいいねえ、——相逢傘の末かけて……」

と唄いながら無器用な大きな手を振りだす。私が吃驚していると、その手でひとつ、招き猫のような格好をしておいて、鼻の下へもっていつて差恥んだように首を縮めて笑う。

布子の下の襦袢から、ポチリと色褪めた赤いものが見えるので、引っぱりだして見ると、黒ちりめんに牡丹の模様の古いのだった。綴ぎ綴ぎで、大きな二寸もある紋があった。

おばあさんの父親安芸守は、白河で切腹したとき、上野の法

親王にはお咎めとがのないようにと建白書のようなものを書いたのだときいていたが、おばあさんに正すと、遠い昔の物語りでも聞くように目を細めて、そうですよそうですよというきりだった。

「戦争なんて、もうもういやなこと、いやなこと、真つ平さね。」  
プツリと言いきって、狐きつねつきのようにだまり込んでいる。背を丸く首を傾かしげた姿を見るとどんなに世の荒波がこの善人を顛てん動どうさせ、こうも呆ぼけさせたかと痛ましかつた。

私はこの老女ひとの生母ははおやをたつた一度見た覚えがある。谷中御やなかごいん隠殿でんの棗なつめの木の木のある家で、蓮池はすいけのある庭にむかつた室へやで、お比丘尼びくにだった。



老年になつてからこの夫妻は一緒に暮す日が多くなつた。

ある日空巢あきすねらいがはいつた。おばあさんはキョトンとした眼で見えていたが、立つていつて座布団ざぶとんを出した。盗棒どろぼうはびっくりして、落つかないお尻しりを布団の上のせたが、お茶を出されてモジモジした。

「あいにく留守にしたあとで、私あたくしでは何のお役にもたちませんで——どうぞ、ごゆるりとなさつて下さいまし。」

盗人どろぼうは飛上つて次の間へゆき、グルリと見廻して出て来た。

おばあさんはいよいよ真面目で、

「ただいまお菓子をとつて参りますから、ちよつとどうぞお待ちを——」

盗人は狼狽あわてた。外へ出られてはたまらない——彼の方が一いち目散くさんに飛出すと、おばあさんが後から、

「もしもし貴下あなた、おわすれものですよ、なんておそそうな——」  
そう言つて着せてやったのは、毛皮のついた外套がいとうだった。

湯川氏が帰るとこの老妻は、盗人を笑つた。

「なんてまあ、狼狽あわてたお客さんなのか。ねえおじいさん。」

「その人は何の用で、何処どこから来た？」

「それを私あたが知りますものかね。老父おじいさんが御存じじやありませんか。」

「私わたしがなんで知るものかね。」

「へえ？ それは不思議だ。私あたはまた、貴夫あなたのお客さまだから、

あなたが御存じだと思いましたよ。」

老人は壁を見ていった。

「私の外套わしがいうとうがないよ。」

「おやまあ嫌だ、あなたが着てお出いでになったのに——おじいさん  
老ろうも耄もうなさった。」

「ばか言え、わしは着てゆかない。」

ふと老父さんは、老妻が丁寧にお辞儀をしている頭のさきを、  
盗どろぼう人が、自分の外套をきて出てゆくのを思いうかべた。そして  
淋さびしい顔をして、私あたしのところへいつけに来た。

誰かが、不用だといっていたインバネスが、身長たけの短ひくいおじい  
さんの、丁度よい外套になりはしたが——

私の父は晩年を佃島つくだじまの、相生橋あいおいばし畔ほとりに小松を多く植えて隠遁いんとんした。湯川氏夫妻もおなじ構内かまえうちに引取られた。七十代の婿むこと八十代の舅しゅうととは、共に豊鑠かくしやくとして潮風に禿頭はげあたまを黒く染め、朝は早くから夜は手許てもとの暗くなるまで庭仕事を励んだ。二人ともに、何が——と。

一人が嶮けわしい山谿やまあいを駈かける呼吸で松の木に登り、桜の幹にまたがって安房上総あわかずさを眺めると、片つぽは北辰ほくしん一刀流の構えで、木の根つ子をヤツと割るのである。寒中など水鼻汁みずつばなをたらしながら、井戸水で、月の光りで鎌かまを磨といでいたり、丸太石をころがしひよりていたりする。日和ひよりのよいころ芝を苅るときは、向うの方と、此

方のほうで向いあいながら、

「いや、手前一向に武芸の方は不得手でげしてな。」

「いや、剣法でもなんでもあのコツだ。どうして、霧にかくれるというが、あなたの豁谷たにを渡るあれだ、あの※吸といったら、實際たいしたものだ。」

「いやどうも、そう仰おっしやられては汗顔のいたりだ。」

——だが、私が松の木の上にいる父を、老人としよりの冷水ひやみずだとよびにゆくと、小さな声で、

「じいさんはやめたか？」

と訊きく、湯川老人の方へゆくと、

「や、もう、お父さんの若いこと若いこと、感服のいたりだ。」

と腰をのばす。この、老<sup>おい</sup>たる婿<sup>むこ</sup>と、舅<sup>しゅう</sup>と姑<sup>とめ</sup>が、どうした事か、毎日の、どんな些<sup>せ</sup>少な交渉<sup>こうせう</sup>でもみんな私のところへ、一々もつてくるのだった。三人の老人が、年寄らしいイゴで三すくみのかたちで、不平<sup>よゆう</sup>も悦<sup>よろこ</sup>びも感謝<sup>かんしゃ</sup>も、みんな私のところへもつてくる。

「婆<sup>ばあ</sup>さんが腰をぬかして——なんともうす腑<sup>ふ</sup>甲<sup>がい</sup>斐<sup>い</sup>ない女<sup>め</sup>か。」

湯川老人がそう言<sup>い</sup>つてゆくと、入<sup>いれ</sup>代<sup>かわ</sup>りに父<sup>ちち</sup>が来て告<sup>つ</sup>げる。

「祖<sup>ばあ</sup>母<sup>あ</sup>さんが築<sup>つき</sup>山<sup>やま</sup>に座<sup>ま</sup>つて、祖<sup>じい</sup>父<sup>い</sup>さんに小言<sup>せうごん</sup>をいわれている。早く行<sup>い</sup>つてやれ。」

おばあさんは私の顔を見ると言<sup>い</sup>つた。

「あたくしはね、あたくしのお墓<sup>はか</sup>を見てびつくりいたしましたのですよ。私は生きてるのか、死<sup>し</sup>んでるのか分<sup>わ</sup>りませんでね。」

やっと分つた。荖ふきを摘みに来たおばあさんは、寒竹かんちくの藪やぶの中に、小犬を埋めたしるしの石を見て、呆然ぼうぜんとしてしまったのだつた。

またある日、湯川老人が私の前に言いわけなさそうに立った。「ばあさんを、ちと、悪くしてしまいましたな。」

小さな眼をパチパチと伏せた。あとから離れの住居へいつてみると、身寄りの男たちが二、三人いた。彼らは具合わるくモズモズした。

おばあさんの体が生しょうたい体なくグニヤグニヤになったというのだ。レウマチで関節の自由がよくなかったので、台湾からよい薬を持って来たから飲ましたのだといった。それならば暗い顔をす

る訳はないがと思うと、効ききすぎたのだとまた言った。それは湯川氏の婿の一人の士族で、官吏をやめて日清戦争に台湾に従軍し、そのまま居ついでしまった土佐弁の、日本人ばなれのした人だつた。

「台湾あちでは、チトチトやつてもよく効くのを、おばアさん一いつとき時に飲んだでナア、いや、別に、悪いもんでも、叱られるよな薬でもないが、チト強いでナア。虎の血と、蛇と——もひとつ……」

猛獣の血と蛇の何かと、もひとつのものを乾し固めて粉にしたのを持って来て、分量はとにかく、八十上の老女に飲ませようとしたガムシヤラな勇氣におどろいてしまった。

肝心なおばあさんはモガモガこんなことを言った。



「とろけてしまうなんて、まるで惚れた<sup>ほ</sup>ようで意気ですこと。おやつちゃん、あたくしや葡萄酒<sup>ぶどうしゆ</sup>でのみましたよ。」

なにしろ死んだら牛肉<sup>ぎゅう</sup>のおさしみを仏壇へあげてくれという人だったから、私は驚きもしなかった。

一年ばかりたった夏の朝、私の寝ている茶座敷の丸窓を、コツ叩く<sup>たた</sup>ものがある。戸を一枚ひくと、老人が、

「ばあさんがどうも変で——」

そう言ったなり、竹<sup>たか</sup>箒<sup>ぼうき</sup>をひいて、さつさと木<sup>こ</sup>の間<sup>ま</sup>にかくれて去<sup>い</sup>ってしまった。

暁<sup>ぎよう</sup>闇<sup>あん</sup>が萩<sup>はぎ</sup>のしずれに漂っていた。小蝶<sup>いくつ</sup>が幾羽もつばさを畳んで眠っていた。離家<sup>はなれ</sup>の明けてある戸をはいってゆくと、薄暗い

青蚊帳あおがやの中に、大きな顔がすっかりゆるんでいた。

も一足早ければ、何か秀逸な遺言を残したであろうに——枕まくらもと許もとに、まだよく色つかぬ柿が、枝のまま籠かごに入れてあった。おじいさんの心づくしであつたろう。

お婆おばあさんが歿なくなると、老翁おじいさんの諦あきらめていた硫黄熱がまた燃てきた。次の間にはもう寝ているものがない、広々した住居に独りでポツネンと机にむかつて、精密な珠算と細字とが、庭仕事の相間あいまに初まり、やがて庭仕事の方が相間にされるようになった。薄すすぎの穂が飛んで、室へやのなか内の老翁さんの肩に赤トンボがとまろうと、桜が散り込んで小禽こどりが障子につきあたって飛廻つても、老翁さん

には東京なのか山の中なのか、室内なのか外おもてなのか、ムツリとして無愛想になつてしまった。

だが、もうさびしい諦めはもっていたと見えて、山へ行くとは言いださなかつた。たつた一度そうした望みを洩もらしたおり、私は出してやりたかつた。山で死ぬのが彼にはいいと思つたが、彼の親類は困ると言つた。それから急に年齢としの衰えが来た。離家はなれの垣根の隅でポツチリずつの硫黄を製煉し、研究している姿が墓ひきのよがえるうに悲しかつた。

私ひとりたよを便りにでもしているように、私がものを書いてある窓に来て一言二言ずついつた。野球のミットのようてのひらな掌を広げると、土佐絵に盛りあげた菜の花の黄か——黄色い蝶をつかんでき

たのかと思うほど鮮かな色があった。

彼の試練からとれた硫黄だった。

「これをひとつ、お見せくださらんか。」

老爺さんの頭には、その時、時の知名の成功者たちの名がうかんでいたに相違なかった。

「実業家や学者にもお近づきがあるでしょうから。」

鮮かな黄色は、私の黒ぬりの机の上にこぼれた。老爺さんは懐から部厚な書きものを出した。

硫黄採煉明細書と版に彫ったように正しく表おもてがき書がきがしてある。

「硫黄は釜かまが痛むものでしてな。」

と老爺さんはやっと発明した製煉釜のことを手真似で話した。私

は老爺さんの心根を思つて、駄目と知りながら知己ちぎの鉱山所長にその明細書を見せたら、その人は首を振つていった。

「惜しいことにみんな外国で発明しられてしまつてゐる。機械はもつと簡便に出来る。だが九十の老爺さんが、よく実地から此ここまで考えたものだ。」

私は九十の老爺さんが以下だけを使つて、パスしなかつた事はきかさなかつた。彼は恐きようえつ悦えつの至りだと言つた。

明治四十三年の九月に佃島つなみに津波つなみが来た。京橋の築地がし河岸一体にまでその水は押上げたほどで、洲崎すやまきや月島は被害ひびが甚ひどかつた。

庭の眺めになるほどの距離にある相生橋から越中島の商船学校前には、避難して来ていた和船おわふねが幾艘いくそうも道路に座つてしまつた

ほどで、帝都には珍らしい津波だった。私の家は老人たちの丹精の小松が成長して、すっかり根をかためていたせいか防波堤は崩れなかった。海水が高いと案じ油断はしていなかったが、うとうと眠った夜中にチヨロチヨロと耳近く水の音をきいた。戸外の暴風雨にはまぎれぬ音なのですぐに目が覚めた。潮入りの池は島中でたったひとつだから、これは池があふれたな、近所に気の毒だとその瞬間に思ったが、よく目を覚すとそれどころではなかった。何もかもが浮出して器物が活動している。ボンヤリしているのは人間だけだった。

電燈は断れた。幸に満月の夜ごろだから、月はなくても空は真暗というほどではない。

離家から、二階にいた中学生の弟が裸で、胸まで水に浸って、探険用の燈火あかりをつけてやってきた。二匹の犬がザブザブ泳いで後について来た。

「老爺さんをとにかく二階へあげておくれ。」  
「というと弟が答えた。」

「とても駄目だよ、おやつちゃんでも言わなければ動きやしない。なんてったって、戸棚の前に座って、硫黄をいじくってる。」

「でも水で大変だろう。」

「うん、床が高いけれど、座ってる胸のところへ来ている。」

「硫黄をみんな二階へあげてあげるといつておくれ。」

「こつちへ連れて来たいが、老人としよりだから流されるだろう、とて





の方に説いた。

「どうも老爺さんが悪いらしいが、医者をやぶというとかからないから、お父さんが風邪をひいたことにして——」

「よし。」

老父は至極簡単で、もの事を逆にいえば唯々いいたくたく諾々いいたくたくなのである。

「なにしろ湯川老人は年とし齡だからな、医者に見せなければいけない。」

そして、その湯川老人はいった。

「ようこそ、お父さんは頑固だからどうも強がつていけない。僕が医者にかかるといって、自分のためだとは知らずに、湯川もま

いったなと言われるだろう。だが、なんぞ知らん、長谷川<sup>うじ</sup>氏のためには呼んだ医者だ。」

カラカラと笑つてつけたした。

「幸と硫黄はなんともなかつた。書<sup>かきもの</sup>物をすこしやられたが、それはまた書けば書けるから、どうか御安心ください。」

だが、死期はせまっていたのだった。保<sup>も</sup>てるだけでもった体は、ポクリと倒れるまで余命を保つていただけだった。医者は言った。何ともないが死ぬだろうと、しかも十日はどうかと——

葬式にも間に合わないだろうかと、台湾から出て来た例の虎と蛇薬の婿は、蚊にさされながらブツブツ言った。

「こんな事なら、わしや言うとかにやならぬことや、仕ておかに

やならんことが沢山沢山あつたに——おじいさん、どこまで他人を困らせる人か、わしやもう、若いころからこの人のためには、ほん、サンザンな目に逢うとるわ。」

医者も驚いた。こんな事はないがと——そのくせ死期は来ているのだが。

「おじいさん癌があつたのだね、驚いたなあ、何時ころからなんだ。」

医者にもわからないものが、誰にも分りようはなかつた。強い、しどい、刺戟のある臭気を、香を焚き、鼻の穴へ香水をつけた綿を挿して私が世話をすると、その時だけ意識が分明して、他の者には近よらせなかつた。そしてお世辞がよかつた。

何に拘こわっているのか——と私は考えた。

「おじいさん、お酒がほしい？」

ニコリとしたような表情だ、私は薬指のさきなに、薄めた清酒をつけて嘗なめさせるとおちよぼ口をした。

「ほう、観音様だな。」

傍から首を出した妹を見てお世辞をつぎたした。

「イヨウ、綺麗になりやがあつたな、弁天様だぞ。」

酒をもひとつとつというように口をあけた。そして露を吸うように、垂しずくらされる雫すべが舌のさきすべにすべると、

——富士の、白さけ……

と幽かすかな幽かすかな声で転うたがすように唄うたった。正まさしく生まているおりなら、

笑みくずれるほどに笑ったのであろう。唇をパクリとした。

でも臨終ではない。ああ結構な、いい往生です、いい往生ですと寄つて来たものはポカンとして当惑した顔をした。

私の心は暗かった。長い一生、一念を封じこめた硫黄山に心を残しているのではあるまいかと。

「老爺さん、硫黄鉞山が売れましたよ。」

「ほ。」

パツと、死んだ瞳に瞬間灯がともった。手を差出した。そこらにあつた重いものを掴んだ手を私は老爺さんの手に触れさせた。

「有難い——みんなにやってくれ。」

私はほほえましくお伽噺のように言った。

「老爺さんの黄金きんの像を建ててあげましょう。」

「ほ。」

満足な瞑めい目もくだった。

嚴肅にしゃちこぼった人たちの方がすぐに悪口した。欲ばつて  
いると——

私にはそう思えなかった。

初秋の風に竹がサラサラ鳴る暁ひつぎ、柩ひつぎは出てゆくのだった。戒名  
は硫黄居士こじと私がつけたが、親類の望みで二字に離してくれとい  
うので、硫石黄竹居士になった。私は臨終に嘘をついたのを、今  
でもちつとも悪いと思っていない。私はみんなが、さまではとい

うのに反対して、黄竹居士湯川老人の柩の中へ、標本になつていた硫黄の、ありつたけの種類をすこしずつ入れてやった。これほどの供養はないと思つている。





# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 木魚の配偶

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>